Graham Greene 研究

The Man Within 論

宮　野　祥　子

I

この小論は Graham Greene の小説の処女作である *The Man Within* を手がかりとして，彼の，作品を生むに到った作家としての人間把握の諸相を考察しようとするものである。

この作品の登場人物はかなり多数であるにもかかわらず，小説を動かしてゆく力は，主人公である Andrews という青年の内的な葛藤である。主人公を除く登場人物達は概して Andrews の心理葛藤の投影として描出されており，結果的には人間像が影の薄い一面的な姿にしかなっていないことも否定できないのである。この一面的であるということについては morality play と結び合せて解釈する考えもある。[(1)] しかしこのような登場人物達の像を抜きにしては，主人公の心理葛藤を追うことはできないことも事実である。そこで Ⅱ章では物語の展開と共に明らかにされてくる Andrews 及び主たる登場人物の人間的特徴とその像を追ってみたい。このことはこれ以後の作品にみられる人間像における諸傾向の萌芽を知ることであり，作品解明の手がかりを得ることにもなると思われるのである。Ⅲ章においてはⅡ章で明らかになった Andrews および他の登場人物の人間像を手がかりにして，物語展開の背後にあるこの作品のテーマを探ってみたいと思う。

尚テキストは，William Heinemann 社，1962年版を使用した。

Ⅱ

主人公 Andrews を最も特徴づけるのは，タイトルの示す通り，自己の中にもう一

つの自己を見出すという自己分裂である。その分裂の有様は次の引用が示すように，自己の行動に対して絶えず問い続ける *alter ego* として意識されているのである。

> Always while one part of him spoke, another part stood on one side and wondered "Is this I who am speaking? Can I really exist like this?"

この二つの自己は<child>と<critic>ということばで区別されている。

> He was, he knew, embarrassingly made up of two persons, the sentimental, bullying, desiring child and another more stern critic.

まず第一の特徴である<child>のもつ意味は<childish comfort>として表わされている。それは bed-cloth の中へ頭を埋めて，古い家具が夜の闇にきしる音や，その恐ろしさから逃避したいという願いである。現実の恐怖から逃がれ隠れて，その恐ろしいものが通りすぎるのをじっと待っていることである。これは現実にたいして受身の姿勢を示しており，現実を打破するという積極的な現実否定ではなく，受動的な現実肯定である。

さらに<child>を説明することばとして，<sentimental, melodramatic, self-pity, bullying, desiring, coward, fear, superficial dreams>などがしばしば用いられている。<sentimental>或は<melodramatic>は道理や事実を重んずる理性ではなく，皮相的な感傷，感情に走りやすい傾向を表わしており，Andrews の場合はこれが母性への憧れにつながっているのである。母の豊かな胸の内に保護されたいという願い<His sentimental melodramatic self, which longed for deep-breasted maternal protection>は，逆に母に守られなければならないような小さい弱い者としての自己認識を表わしているとも思われる。そのことがまた<self-pity>という傾向を説明していることにもなる。また根の浅い夢想<superficial dreams>とは先に述べた現実逃避の傾向を示しているのであって，<a childish game in which there was no harsh reality>という厳しい現実をのがれて，bed-cloth の中に頭を隠すような一時のがれの，束の間の慰安に安らぎを見

出す人間である。このような現実の厳しさに恐怖し，それに直面するのを避けようとする傾向は，一方において <cowardice> のあらわれでもあり，他方それが <bully> という逆に弱い者いじめという性質をもそなえた存在として描き出されているのである。自分よりも弱い存在に向って，威張り散らすことは，自分の欲望，欲求が他者によって制御されることを苦痛と感じ，その苦痛に対して敏感に反応すると同時に，弱者に対する横暴さという小胆をあらわしていると思われる。これは自分の欲求には盲従的であり <desiring> ということばと共に，肉体に伴なう本能的な欲求に強く動かされやすい傾向として Andrews の一面が形象されていると考えられるのである。

以上のような <child> に対立する傾向として描かれているのが <critic> である。それは <child> の傾向に走ることに対して常に皮肉たっぷりに問いただす批判者であって，<childish comfort> のなかにぬくぬくと入り込んで動かず，現状を維持したいという傾向にたいして居心地悪くさせ，Andrews を葛藤の苦しみへと駆りたてるものなのである。

> Why should any man be plagued as he had ever been plagued, with all the instincts — desires, fears, comforts — of a child and yet possess the wisdom of the man?

その葛藤は上記引用に示されているように，子供に本来的に備っている本能的欲求とおとなの属性である知恵との間に生ずるものである。それは本能の盲目的であるのに対して知恵の賢明さ，見通しを識ることである。<child> がもつ皮相的な感傷に対して <its own words — hard, real, trustworthy> という現実に基づいた目覚めた精神であり，現実を直視する厳しさである。それ故信頼に価し，期待することができ，確かさへと続くものである。Andrews 像を以上のように理解することができるのである。

Carlyon は Andrews の父の死後，子供の彼を船につれ帰り世話をした密輸団の首領であるが，Carlyon の特徴は外見と内面との間にある矛盾として描出されている。外見は野卑で一見猿を思わせ，内面にはそれに相応しくない知的願望を秘めているという矛盾である。例えば次の引用はその Carlyon の姿を描いている。

> the broad shoulders, short thick neck, low receding ape-like brow and the dark eyes that in a flash tumbled to the ground the whole of the animal impression which the body had raised.

その知的願望は <animal impression> を一瞬にして否定する眼のきらめきや自分の肉体に対する軽蔑 <contempt at the body> を表わして光る眼で描出されている。この外見にそぐわない知性は具体的には勇気と理解力をもち，人生に途方もなく夢を描き，<truth, danger, poetry> を愛することで表わされており，荒々しい海の生活のなかで，彼は Andrews の望む全てを備えた友であり，理想像ともなっているのである。例えば次の一節が描出しているように，Andrews と Carlyon には愛するものを共有する精神的一致がある。

> He was brave, adventurous and yet he loved music and the things which I loved, colours, scents, all that part of me which I could not speak of at school or to my father.

その理想像は <hero worship> の対称にまで高められ，さらに Carlyon の中に理想的な父の姿を見出すまでに昇華している。もし Carlyon が父であったなら母の心を破滅させることもなく，Andrews 自身は気骨のある人間に生れついていたであろうという，絶対的な信頼をよせるのである。Andrews が信頼と憧れを捧げるこの Carlyon の魅力は彼の声のもつ美しさである <music> ということばで表現されている。その美しさは密輸団の <brutal life> のなかに，<the cool beauty> をもたらすものであり，次の引用が示すように Andrews の望む全てを象徴するものでもある。

> The fascination of the voice! It seemed to hold for Andrews everything which he so much desired — peace, friendship, the end of a useless struggle.

それは平和で穏やかな争うことのない生活を暗示しており，その美しさの本質をなしているものは，後に Andrews の心を奪う Elizabeth の声の美しさと比較されるときにさらに明白になるのである。次の引用はこの二つの <music> の描写である。

> now he sat still, watching with a strange disinterestedness the two musics come in conflict for the mastery of his movements. One was subtle, a thing of suggestions and of memories; the other, plain, clear-cut, ringing. One spoke of a dreamy escape from reality; the other was reality, deliberately sane. If he stayed sooner or later he must face this fear; if he went he left calmness, clarity, instinctive wisdom for a vague and uncertain refuge.

Elizabeth が現実であり確かさ，明晰であるのに対して Carlyon の声があらわすのは捕え難い微妙な暗示と記憶であり，現実から夢想への逃避である。さらに Elizabeth の知恵に対立して，漠とした不確かな保護をあらわしているのである。このような Carlyon 像は先述した Andrews の <child> の示す傾向と一致することは明白であろう。

Andrews の死亡している父母は具体的な登場人物ではないが，Andrews の心理葛藤を理解するためには父の像の果す役割を知ることは重要である。Andrews の記憶には <bully> である父の姿が鮮明であって，Carlyon 以前に首領であり <hero, king> であった父の姿とは一致しないのである。例えば次のような記憶が家庭での父の姿を伝えている。

> "I loved my mother," he said. "She was a quiet pale woman who loved flowers. We used to go for walks together in the holidays and collect them from the hedges and ditches. Then we would press them and put them in an album. Once my father was at home — he had been drinking, I think — and he found us. We were so busy that we didn't hear him when

> he called. He came and tore the leaves out of the album and scrumpled them in his fists, great unwieldy fists.

母と息子の喜びである押花のアルバムを，自分の思い通りにならないという理由で台無しにしてしまう父は母の心を引裂く存在であり，母を愛する息子の憎しみをかうのである。このような父の死は Andrews にとって恐怖の終りであり <a life of peace> の始りを意味しているのではあるが，<a bully who killed his wife> である父は，先に述べた如く<bully>ということばによって Andrews の<child>へと連なっているのである。またロマンティックな夢に駆られて父と結婚した母，花を愛する物静かな母には，Andrews の Carlyon に見出した夢想しがちな傾向，美しいものを愛する心と一致する傾向が見られるようである。

Lucy という女性は検事である Sir Henry Merriman の情婦という設定であるが，Andrews との関わりにおいては最初から売春婦にそなわる魅力をもつ女性として描出されている。その魅力は <a particular challenging air that he knew well from pothouse women> と挑撥するような態度で表わされており，次の引用が示すように，その美しさは愛も尊敬も呼び覚ますことがなく，ただ Andrews の <animal> な面にうったえているのである。

> Here was no love and no reverence. The animal in him could ponder her beauty crudely and lustfully, as it had pondered the charms of common harlots

後述する Elizabeth とは異なり，Lucy は単なる優しいことば以上の楽しみを与え，しかもその責任など全く問わないその場かぎりの女性であって，彼と同じ<lustful body and despicable heart> の所有者である。Lucy との一夜は Andrews には自らを汚したという自己嫌悪感をもたらすのであるが，Lucy は相手を問わず肉体を通して自分の生を喜ぶのである。彼女の自己に対する幻滅感は傷が癒されたならば元通り健康をとりもどす肉体のように非常に再生力に富んだものである。これは彼女が Andrews に認めた良心などとは無縁な生であって，彼女にとっ

ては<clean enough to go back>という汚れることと清らかになることの繰返しが生なのである。このような Lucy の姿はまた Andrews の <child> のもつ本能的であり，欲望に対して弱い傾向と同質であると思われる。

Elizabeth は Andrews が冒頭 Carlyon 一味を裏切って逃亡中，疲れはててたどりつく家に住む若い女性で，青白くほっそりとして，ゆれ動くローソクの炎のイメージを与えられている。 Andrews が徐々に心奪われてゆく彼女の美しさは冷たい無生物のもつ美しさであり，その賢さは年令を超越したものとして描かれている。この美しさと賢さは世間の男性のいわゆる対称となるようなものではなく，先に述べた Lucy と比べた場合，

> She was more desirable and more lovely, but infinitely more distant.

というように，より望ましくより愛らしいのに，無限に遠い存在なのである。彼女は <women> という呼名に相応しくない女性のように Andrews には思えるのである。Elizabeth に接近すれば彼女にはどこか神秘的なところがあって，Lucy がどうにでもなる <easy woman> であるのに対して， 近づきがたい存在なのである。この点について次の引用が明らかにしている。

> There was a kind of mystery in Elizabeth, a kind of sanctity which blurred and obscured his desire with love.

つまり彼の欲望を消してしまうような何か神秘で神聖清浄なところが Elizabeth にはあって彼女を普通の女性と同様に扱うことは冒瀆であるような気がするのである。

追跡してきた Carlyon から Andrews を守るために彼のカップを偽って Elizabeth は飲み干すのであるが，この姿を key-hole からのぞき見た Andrews は彼女が自らを汚したと思うのである。そしてその時， この清らかな存在である Elizabeth は Andrews にとって <...but now in heart he knelt to her. She is a saint, he thought.> と聖者の意味をもってくるのである。この <saint> としての彼女は，神の愛と真の勇気と高潔さを教え， Andrews に真の勇気を求めるよう

行動させる力となるのであるが，二人のこの関係は愛を告白し合って恋人同志になった後にも変化せず，次の引用にあるように，<serve>ということばが Andrews の Elizabeth にたいする愛の性質を特徴づけているのである。

> You are holy. I don't see how I can ever touch you without soiling you a little, but, my God," ... "I'll serve you, how I'll serve you.

また，Andrews は逃亡の苦しさから救ってくれる人を夢想するのであるが，その人も <saint> のイメージを所有し，同時に <mother> の優しさをもつ人である。次の引用がその空想場面である。

> He saw it opening, and there would appear an old white-faced woman with the face of a saint. She would be like a mother to him and bind his wrist and give him food and drink, and when he had slept he would tell her everything...

ここに描かれている，母に何もかも話したいという気持と同じ気持を Andrews は Elizabeth に対して抱いている。この何もかも知ってほしいという願い <He had a sudden wish to tell her everything, from what he was fleeing and for what cause> に応ずるかの様に Elizabeth の身振りは彼の恐怖や惨さや逃げまどう身心を <enclose> してくれるかのような理解と慰めを表わしている。この母性のイメージはまた <as she would speak to a child fearing the dark> や <she said, as though speaking to a very stupid child> という表現にも見出すことができるのである。

このような Andrews の憧憬は Carlyon の場合と同様に声の美しさとして表現されており，前述した如く Carlyon の声と比較されている。Carlyon が現実から夢想への逃避を表わすのに対して，Elizabeth は，くっきりと彫り上げられた白い大理石 <a voice carved out of white marble> で象徴される <sane> 目覚めた正気を示すのである。一方の不確かさに対立する Elizabeth の明晰と，落着きと知恵である。この知恵へと導き，同時に現実をも意味する Elizabeth は Andrews の <critic> の示

す，目覚めて見通すことのできる精神へと通ずるものであるということができよう。

Ⅲ

この作品のテーマは一見，裏切りという行為とそれにともなう恐怖と逃亡とを中心にしているように思われる。しかしながら，Ⅱ章に述べた如く，主人公 Andrews の性格上の特徴と登場人物達の傾向とを合せ考えるときに，この裏切りという行為の背後に，人間の自己の確かさを求めようとする意志を読みとることができるのではないだろうか。それは Andrews の <child> が示す，現実の厳しさから逃れて保護を求め，その中でぬくぬくと現状を維持したいという傾向と，<critic> という現状維持に対する絶えざる批判者としての傾向との葛藤のなかから明白になってくる現実つまり自己存在への反撥，反抗，さらに Elizabeth との出会いを契機としてなされる新しい自己発見への可能性追求というテーマではないだろうか。換言すればそれは混沌 <chaos> から統一 <the promise of his two selves at one> へという精神の変遷をも示していると思われるのである。以下その事実を明らかにしてみたい。

Andrews は税務官に密輸入の日時と場所を無署名の手紙で知らせることにより，仲間達を裏切るのであるが，そのような行動に駆らせた理由は死者に対する嫉妬と仲間から受けた軽蔑であり，これはさらに裁判の場面で次のように説明されている。

> "It was because I had a father whom I hated and he was always being put before me as a model. It made me mad. And I'm a coward. You all know that." ... "I was afraid of being hurt and I hated the sea and the noise and the danger. And unless I did something it would have gone on for always and always. And I wanted to show those men that I was someone to be considered, that I had the power to smash all their plans."

死者とは Andrews の父であり，船乗りとして父の様に立派ではないという軽視に対する反感が裏切りの理由とされている。さらにそれは危険や喧噪に満ちた嫌悪すべき生活が永久に続くことを打破する手段でもあったのである。これらの背後にあるのは Andrews の <I am better than my father, for he had no dreams, and that part of him that men admired came not from following an ideal but from mere physical courage.> という理想をもたない父への批判と仲間の間では英雄である父からの <Do not do as your father> という訣別，独立を目指す精神である。そしてまた一人前の自己を顕示したいという願いである。この願いと共に，裏切りの背後には荒々しい海の生活からの逃避によって示される平安と美への憧れ <He longed for peace and beauty.> を見出すこともできるのである。

つまりこの作品は，裏切りという行為を出発点としているのであるが，以上述べた如くこの背後には主人公の現状（父への劣等感，仲間の軽蔑，荒んだ海の生活）への反撥，反抗と，この現状への訣別が潜んでいるのである。この訣別すべき現状は <chaos> ということばで表現されているのである。

> "What do you mean by chaos?" "It is as though," ... "there were about six different people inside me.

<chaos> とは無秩序な混乱状態であり，心の闇をも指すのであるが，Andrews の混乱状態はさまざまな方向へと駆り立てる六人位の人々で象徴されている。これはひとりの人間として統一がなされていなく，向うべき方向の定っていない精神状態を示していると思われる。光に照らされて，あるべき秩序立った姿が明示される以前の混沌状態なのである。この状態は <I'm listening to music now. Go on talking to me. While I hear you all this chaos ... is smoothed out.> というように Elizabeth の側にいて，彼女の声に耳をかたむけることによって，秩序ある世界へと変化することが暗示されている。この<music> へ耳をかたむけるということは，次のAndrews と Elizabeth の問答が示すように Andrews の望ましい状態を明らかにしてくれるものである。

> "Is there anything you care for or want?" ... "To be null and void," he said without hesitation. "Dead?"... "No, no," he

said, "not that." ... "When music plays, one does not see or think; one hardly hears. A bowl—and the music is poured in until there is no 'I'; I *am* the music."

望ましい状態とは無存在であり，空虚な状態であって，器である自分の中に音楽が流れ込んで <I *am* the music> というように自分が音楽そのものになることである。意識を全て消滅させ，静止し，完全に受身の状態で自己とは異った存在に充たされ，自分がその異った新しいものそのものになり切ってしまうことである。これは完全な自己変貌を希求していることであろう。[(2)] この音楽による自己認識は，次の引用にも示されているように Andrews の二つの自己の一致を約束する平安の状態をも表わしているのである。

> ... that inside he would leave someone who seemed to carry far behind eyes, glimpsed only obscurely and at whiles, the promise of his two selves at one, the peace which he had discovered sometimes in music.

Elizabeth の家を立ち去り難く思う彼は音楽を聞くときの安らかさ，つまり自己変貌の可能性，それは心が分裂しない状態でもあるのだが，その可能性を Elizabeth に見い出しているのである。

Ⅱ章で述べた如く，母と聖者のイメージをもつ Elizabeth に Andrews は <peace> への可能性，つまり <critic> の希求するところのものを見出しているのである。それに反して Lucy との出会いは，彼が抜け出してきた過去のどろどろした混沌の状態へ逆行した <had fallen back into the slime from which he had emerged> ことを表わしている。Elizabeth と共にいることは真の勇気にあふれた自意識に捕われない新しい生活を意味したが，Andrews の<desiring child> のもつ弱さに <appeal> する Lucy と共にいることは，Elizabeth への裏切りであり，<child> の世界への退化を表わしている。Lucy の存在は，このように Andrews の内的葛藤をより鮮明にするものとして描かれているのである。

前述したように Carlyon は Andrews の望む全てであったが，Elizabeth との出会いの後には愛と憎しみの相反する感情の対称となるのである。それはまた信頼と恐怖の感情でもあって，これは彼に対する Andrews の気持の変化によるものである。今迄は，素晴らしく魅力的であった Carlyon を，次の引用が示すように今は醒めた眼でみつめているのである。

> He tried to laugh — the man was only a romantic fool with an ugly face. That was the real secret of his humility, his courage, even his love of beauty.

Carlyon は本当は空想好きな馬鹿者で，今まで望ましく思われたことは全て空想から生じていたのにすぎないのだという評価に変化している。これは <hero worship>の対称である Carlyon への訣別を意味しており，Carlyon に見出していた憧憬と信頼の念は，Elizabeth との二者択一を迫るものとして描出されている。Carlyon と Elizabeth の声の美しさを表わす <music> において，二者は同等のものとして描かれていたのであるが，次の引用にあるように <silence> である Elizabeth の勝利が示されている。

> The two musics had fought for final mastery — one alluring, unreal, touched with a thin romance and poetry, the other clear-cut, ringing, sane, a voice carved out of white marble, the other was silent in death, but silence had conquered.

これは Carlyon の空想的で現実を逃避しようとする傾向が，Elizabeth の目覚めた正気に打ち負かされたことであり，Andrews の <child> が <critic> に打ち破られていくことが暗示されていると思われる。このような葛藤を経て，テーマは自己の再発見へ，統一へと進んでいると思われるのであるが，それは Elizabeth の死を中心にして描かれているのである。

水を汲みに出かけた Andrews は，遠くから Elizabeth の小屋に Carlyon の手下が入るのを見るや否や彼は恐怖にかられて逃げ出してしまうのである。その恐怖に捕われた姿は <a man trapped in a shallow bog> と表現されており，この泥

沼に捕えられた姿は前述した <child> の世界を表わす <slime> どろどろした混沌のなかへ逆行した姿とイメージが共通しているのであって，<I trust you absolutely.>という Elizabeth を裏切った Andrews の恐怖と臆病は彼の<child> な面を表わすものであり，また，Lucy や父によって表わされていたものでもある。だから彼はこの臆病な心を振り切って小屋に帰ってきて，彼が護身のためにと置いていたナイフで Elizabeth が身を守るために自ら死んでいるのを発見したとき，<I am my father, he thought, and I have killed her.> と悟るのである。Elizabeth を裏切って逃げ出した臆病は次の引用に示されているように，父からゆずられ彼のなかに生れたものである。

> was there anything of himself that was not his father? His father was his lust, and his cowardice had been fashioned by his father.

だから彼の真実の敵は自己内部の父であり，それが彼の中にあって彼を混乱させ，友と戦わせたのである。

Elizabeth の存在は神聖なものに対する彼の存在の意味と可能性 <a meaning and a possibility to holiness and divinity> を教えたのであるが，その完全な絶滅である死を前にして，彼は Carlyon への恐怖や憎しみは子供の遊びにも等しいもので現実感の乏ぼしいものになっていることを識るのである。このような認識に基づいて Andrews は Elizabeth を殺害した罪を自ら負う決心をする。彼のその決意は <a double duty of salvation, of his friend from persuit and of himself from his father> という二つの目的をもつものである。このようにして自分を父から訣別させようと企てた時，つまり自らの意志で自らの存在を確立しようとした時，彼は初めて，ひとりの人間として確立し得る可能性を手に入れたのである。

> His father's had been a stubborn ghost, but it was laid at last, and he need no longer be torn in two between that spirit and the stern unresting critic which was wont to speak. I am that critic, he said with a sense of discovery and exhilaration.

ここに示されている父の魂と<critic>の間で二つに引裂かれることなく，私は今やあの絶えず自己否定し続けてきた<critic>であるということばは，新しい自己発見を意味している。したがって，罪を負う決意を Elizabeth の耳元にさゝやく彼のことばは，きっと成功してみせるよ<the first proud words he had ever said, "I shall succeed">という生れて初めてひとりの人間として，自らの意志に基づき，確信をもって行動する人間の誇りにあふれているのである。

Ⅳ

以上の考察によって，この作品は Andrews という青年の裏切りという行為を通して，彼の自己を確立しようとする経過を述べたものであると伝うことができよう。それは混沌から統一へという変遷として読みとることもできるのである。混沌は彼の内部にある<about six people>[3]が象徴しており，その統一へと働きかける原動力が<child>と<critic>という相対立する傾向の葛藤で表わされており，<peace>への希求がその手がかりを示していると思われるのである。相対立する精神の葛藤を特徴とする人間像は R. L. Stevenson の *The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* を連想させるありふれたものであって，人間分析という点で同じ方法を取ってはいるが，Andrews の場合，その分析方法に力点が置かれているのではなく，その葛藤を通して彼がさらに新しい自己を発見しようとしたところに違いがあると思われる。このことが結局 G. Greene という作家の特徴となって諸作品の背後に流れているのではないだろうか。人生のドラマの奥に人間の生の実相と意味を捕えようとしているように思えるのである。

Andrews も含めて登場人物達が，さらに変化成長し，人間像として定着してゆく過程は稿を改めて考察したいと思う。特に，欠点のない純粋で理性的な美しさの Elizabeth 像に比べて，だらしない肉感的な美しさの Lucy 像の方が，人間として豊かなイメージが与えられているのは興味深いことである。例えば Sir Henry Merriman に対して Lucy がみせる愛でもなく恋でもない優しさと，間違ってはいるが，彼の仕事の成功のためにも自分の肉体を提供するという行為は，Greene の作り上げる人物達のなかでさまざまに変化し，発展しているようであって，Greene の描く愛の一つの特徴をなしていると思われるのである。

註1　Carlyon の行動に疑問を抱きつつも，Andrews を Everyman, Lucy と Elizabeth を肉体と心，恋人と母親，Jennings を嫉妬心，Carlyon を悪魔の虚栄になぞらえている。
Francis L. Kunkel: *The Labyrinthine Ways of Graham Greene*, Sheed & Ward, New York, 1959 P.29

註2　この点に関してこの場合の Andrews の望みは death-wish であるという考え方がある。そして最終場面において暗示される Andrews の自殺を説明するものとして解釈されているのであるが，事実としての死と，死という行為が表わす可能性或は意味とは混同されてはならないのであつて，この場合著者がいうような逃亡を終らせるための，事件の解決としての死だけを意味しているとは思われないのである。
K. Allott & M. Farris: *Tke Art of Graham Greene*, Russell & Russell・Inc, New York, 1963 P. 58

註3　Andrews の二面を higher self と lower self に区別し，Andrews の父と母，Carlyon と Elizabeth，Lucy と Elizabeth とが彼の性質の相争う factions を人格化したものであると述べている。しかし about six people については何も述べられていない。
註1に同じ PP. 24～25